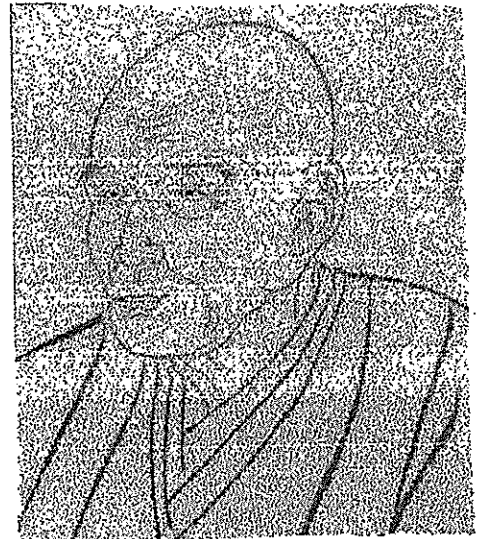


葛重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和7年3月20日・第3号・馬琴・意外編・日日光街道・越ヶ谷宿を考える会・発行

越谷に来ていた

曲亭馬琴・・・



曲亭馬琴

曲亭馬琴は「きょくてい ばきん」。滝沢馬琴というと、滝沢は家の名で、馬琴は筆名（ペンネーム）だから、これを組み合わせるのはダメなのです。でも「くるわ（廓）で、まこと（誠）」と読む～というのは、時代は狂歌の時代であり、宿屋飯盛、やどやめしもり元本綱、もとのもくあみ今田部屋住、いまだにへやずみ柿下手丸、かきのへたまる門限面倒、もんげんめんどろ土師搔安、はじのかきやすなどと狂歌師たちが自分の名前を付けていた時ですから、なるほど～いい名前のようにも思われますが～

その曲亭馬琴の結婚したのが、いまの越谷・南荻島から出た「お百」。父は荻島の隣の岩槻区すえだ末田出身、母は南荻島出身。お百が養女に行ったのが荻島から出て、江戸で履物屋をしていた養親なのです。

馬琴本人の方はレッキとした武士の出とはいっても、「旗本の用人」というギリギリの「武士」といえる位の武士です。馬琴も、こんな「武士」に嫌

気がさして、できれば好きな文筆で暮らしたいと、書き上げた作品を持って
鳶屋に飛び込む。そう簡単にプロの道は開けず、番頭になら雇ってやると言
われ、こんなところで働いていれば、先輩たちから教えてもらえるだろう
と考えて鳶屋の中でウロウロしている。そうすると、まずは身を固めた方が
よいといわれ、それもそうかと身を固めた相手が「お百」。お百の履物屋は
貸家を持っていて、生活には苦勞がなさそうだったこともあったようです。

そして、この結婚による「お百」の家族との新しい人間関係はどうだった
のでしょうか。馬琴は、結婚により武士階級を離れたはずではあるが、それ
に対する未練は捨てきれず、江戸から離れた荻島の農家の人々との関係は冷た
いものではなかったかとも想像できますが、そうでもなく、たとえば、享和
元年（1801）6月に、お百の実母（はつ）が荻島村の六左衛門宅で亡くなっ
たときには、馬琴もその宅にかけつけ、その葬儀を助けたとのこと。

妻の母の葬儀に出かけるなど、慣れない農家の葬儀にも、面倒がらずに手
伝いもかねて参加するなんて、馬琴といえど口難しいヒトのように思われま
すが、案外、いいおじさんであったのではないのでしょうか。

もう一つ、誤解を解いていただきたいこと

馬琴の奥さんの「お百さん」のこと。「お百さん＝悪妻」というイメージ
が定着していましたが、それは馬琴が表向きで「うちのかみさんは悪妻」と
いつていたのを、真面目に受け取った周囲の方々の誤解によったとも考えら
れます。馬琴の残した書物には、江の島、鎌倉、塔の沢温泉などに連れてい
ったこともあるなどとあり、「お百さんサービス」もしていたようですから。

馬琴の俳句の師匠は越谷吾山

馬琴は長兄の滝沢興旨（俳号・羅文）に続き、俳句は越谷吾山の弟子となりました。17歳で吾山撰の句集「東海藻」に3句が選ばれ、そこで初めて馬琴の号を使いました。吾山は、越谷新町の名主・会田久右衛門家で生まれ、越谷で俳句を作ったり指導をしたりしていましたが、明和6年（1769）、53歳のころ江戸へ移ります。当時の江戸俳壇は俳聖芭蕉の死後、混沌の状態。その中で、馬琴と兄の羅文を弟子としたのですから、実力を備えた宗匠であったのでしょう。



越谷吾山

市内には越谷・久伊豆神社の池のそばに「出る日の 旅のころもや はつかすみ」、「ひとつるべ 水のひかるや けさの秋」との句碑がお隣で、墓もある天嶽寺の不動堂の脇に立っています。

吾山は俳句以外に大きな仕事を残しています。それは「物類称呼」というわが国で初めての方言辞典を作ったことです。ドイツの方言学の始祖は童話で有名なグリム兄弟で、そのグリムの兄の生年の1785年、弟の生年の1786年が「物類称呼」刊行の延宝3年（1775）に近いのが興味を引きます。

方言としては3200語。吾山は生活や慣習に関心をもち、その方面の方言を多く選択したようです。日本の方言学は吾山から始まる～、大学の「方言学」の講義は「物類称呼」から始まる～といわれるものが刊行されたのです。

薦重～馬琴の文化的人脈は、ここでも恥ずかしくない成果を収めています

曲亭馬琴のこと ア・ラ・カルト

☆生涯略歴 1767 (明和 4) 馬琴 生まれる (妻・お百・1764・明和 1 生) 1787 (天明 8) 松平定信 老中に

1792 (寛政 3) 蔦屋の番頭になる 1794 (寛政 5) 馬琴・お百 結婚

1797 (寛政 9) 馬琴長男・鎮五郎出生 蔦屋重三郎 脚気で死去

1814 (文化 11) 南総里見八犬伝 1 巻刊行

1842 (天保 13) 八犬伝完成 (98 巻・106 冊)

1848 (嘉永 1) 馬琴 死去

☆馬琴の先祖：祖父の代の滝沢興吉 (おきえ) は、北埼玉郡川口村 (現・加須市) の村長・御烏見役の真中 (まなか) 治
介の次男から滝沢家へ夫婦養子に入った

☆馬琴と葛飾北斎：生涯は、馬琴が1767 (明和 4) ～1848 (嘉永 1)、北斎が1760 (宝暦
10) ～1849 (嘉永 2)。馬琴の著書に挿絵を描いたのは北斎が一番多いとのこと。

お互いに、頑固一徹、怒りっぽい性格のようですが、その二人は案外、仲がよかった
ようです。馬琴と北斎がペアを組んで仕事をしたのが文化元年 (1804) ～12 年
(1815)。その中で、文化 3 年 (1806) の春から夏にかけて 3～4 か月、二人が馬
琴の住まいに同居し、仕事に励んだといわれます。馬琴の手紙には、北斎をほめる記
述も見られ、その画力は馬琴も認めざるをえなかったのではないのでしょうか。

☆馬琴を育てた、師匠・吾山の指導は～

馬琴の句「二つ三つひとつになるや露の玉」を、師匠・吾山はどう直したのでしょうか。

「わかれてはひとつになるや露の玉」だったそうです。

参考書 ◎馬琴の大夢 信太純一著 岩波書店 2004 ◎曲亭馬琴日記別巻 柴田光彦編 中央公論新社 2010

◎滝沢馬琴 高田 衛著 ミネルヴァ書房 2006 ◎八犬伝の世界 高田 衛著 中公新書 1980 ◎馬琴綺伝

小谷野 敦著 河出書房新社 2014 ◎越谷吾山 杉本つとむ著 さきたま出版会 平成 1 ◎ウィキペディア